

# 引退競走馬のセカンドキャリアの現状と今後

4年 12組 5番 岩井陽哉

# 目次

【はじめに】 .....	1
第1章：日本における競馬産業.....	1
(1) 日本競馬の歴史.....	1
(2) 競馬産業の全体像.....	2
(3) 競走馬のライフサイクル.....	2
(4) 経済規模と社会的影響.....	3
(5) 成功の影にある課題と動物福祉への影響 .....	3
第2章：「動物福祉」の視点から見た馬の福祉 .....	4
(1) 動物福祉の定義.....	4
(2) 引退競走馬と動物福祉との関係 .....	5
(3) 福祉向上のための事例.....	5
(4) 福祉の重要性 .....	6
第3章 セカンドキャリアの多様性とその可能性.....	6
(1) セカンドキャリアにおける再調教・再教育の重要性 .....	6
(2) 競走馬から乗用馬へのトレーニング転換.....	7
(3) 具体的なセカンドキャリアの事例 .....	7
(4) 海外の成功事例との比較分析 .....	9
(5) セカンドキャリアの可能性のまとめ .....	11
4章 動物福祉の観点から見た今後の課題.....	12
(1) 制度的課題—「仕組みとしての福祉」がまだ整っていない.....	12
(2) 競馬産業の責任—「どこまで面倒を見るのか」という問題.....	12
(3) 社会的認識・教育的課題—「命の尊さ」を社会にどう伝えるか.....	13
(4) 動物福祉の実現に向けた方向性—「馬にとっての幸せ」と「人との共生」をどう 両立するか .....	13
(5) まとめ：制度・産業・社会が一体となった福祉の実現へ .....	13
【おわりに】 .....	14
【参考文献一覧】 .....	14

## 【はじめに】

競馬は日本において長い歴史を持つスポーツであり、年間多くのファンに親しまれている。しかしその一方で、現役を引退した競走馬の多くがその後の行き場を失うという問題が指摘されている。馬は長くて30年ほど生きるが、競走馬としてのキャリアは長くても8年ほどである。セカンドキャリアが見つからず、行き場を失った馬たちは、「行方不明」とだけ言われ、その後の処遇がどうなったのか明確に公表されていないことが多々ある。

このように、現状では競走馬の多くは引退した瞬間から社会的にも経済的にも「不要物」として扱われる現実がある。こういった現状は、単なる「引退競走馬の処遇」という枠にとどまらず、命に対する社会の態度、スポーツ産業のあり方、公共政策のあり方を根底から問い直すべき問題であると考えられる。こうした「引退競走馬のセカンドキャリア」問題は、動物福祉や持続可能な競馬産業の観点から近年注目を集めている。本稿では、「可哀想だから助けるべき」といった情緒的な結論ではなく、現状の課題を整理し、なぜ多くの引退競走馬が十分なセカンドキャリアを得られていないのかを、文献調査、事例研究、インタビュー調査を通じて動物福祉・社会意識などの観点から明らかにすることを目的とする。

## 第1章：日本における競馬産業

### (1) 日本競馬の歴史

日本の近代競馬は、1862年に横浜の外国人居留地で始まり（JRA、2023）、1888年には根岸競馬場で馬券の発売が行われていた（根岸競馬記念館、2019）。日本人による馬券発売は1906年に黙認されたが、競馬倶楽部の乱立や過熱による弊害が生じ、1908年の新刑法施行に伴い馬券の発売が禁止された。

その後、競馬による馬産振興を目的として法整備が進められ、1923年に旧競馬法が制定・施行され、再び馬券発売が合法化された。1936年の改正で全国の競馬倶楽部は統合され、日本競馬会が設立された（JRA、2014）。

終戦後の1948年には日本競馬会が解散し、新たに現行の競馬法が制定され、国営競馬が実施された。1954年9月16日に日本中央競馬会法が施行され、日本中央競馬会（JRA）が

設立。国営競馬を引き継ぎ、現在の中央競馬運営体制が確立した（日本中央競馬会、2015）。

日本競馬は娯楽・賭け事・文化として今日まで親しまれており、単なる賭け事であるだけでなく長い歴史を持つ社会的産業であり、競走馬はこの産業の中心にいる動物であると言える。

## （2）競馬産業の全体像

日本における競馬産業は、国の管理下にある公営競技の一つとして発展してきた。競馬は単なる娯楽やギャンブルではなく、畜産業や地域経済に密接に関わる複合的な産業構造を持つ<sup>1</sup>。競馬の収益は国庫や地方自治体に還元され、農業振興や社会資本整備などにも活用されており、国民経済に一定の貢献を果たしている。

日本の競馬は、主に「中央競馬」と「地方競馬」に分けられる。中央競馬は1954年に制定された日本中央競馬会法に基づき設立された日本中央競馬会（JRA）が運営主体であり、東京・中山・京都・阪神など全国10か所の競馬場で開催される。一方、地方競馬は地方自治体が主催し、地方競馬全国協会（NAR）がその統括的役割を担っている。中央競馬は全国的な規模と経済力を持ち、売上・賞金額ともに地方競馬を大きく上回るが、地方競馬は地域に根ざした興行として独自の役割を果たしている。このように、中央と地方の二層構造によって日本の競馬は成り立っている。

## （3）競走馬のライフサイクル

サラブレッドは年明けから初夏にかけて主に北海道の生産牧場で生まれ、年間7000頭から8000頭が生まれる<sup>2</sup>。1歳になるまでは、広い牧場で走り回り、競走馬になるための基礎体力を養う。生後1歳頃からは、育成牧場に移り、人や馬具に慣れるための訓練を行う。訓練を終えると、セリ市場（庭先取引など例外あり）を通じて馬主や調教師に購入される。その後は競馬場に入厩し、デビューに向けての調教を重ね、能力試験に挑む。試験に合格した馬たちはようやく競走馬としてデビューすることになる<sup>3</sup>（図1）。どの馬も、最初は「新馬戦」という同じ舞台からスタートする。現役生活は平均5歳までで、陣営の意向次第では8歳から9歳まで現役生活を送り、引退することとなる。このように、競走馬の生産から引退までの過程は、経済の仕組みの中で動いている。馬は生産時点からそのポテンシャルに基づく将来の成績を期待され、競走期間中はその成績によって市場価値が評価される。そして競

---

<sup>1</sup> 総務省「競馬の公益的役割に関する報告書」（2020）

<sup>2</sup> 軽種馬協会（JBBA）『軽種馬白書 2023』

<sup>3</sup> 島田明宏『馬体は語る』（講談社、2018）

走能力を失うと経済的価値が急激に低下する。この構造は、競馬が巨大な経済システムである一方で、動物を資源として利用する側面を持つことを意味している。結果として、競走馬の生涯に渡る福祉よりも競技期間中の利益が優先されやすい傾向がみられる。

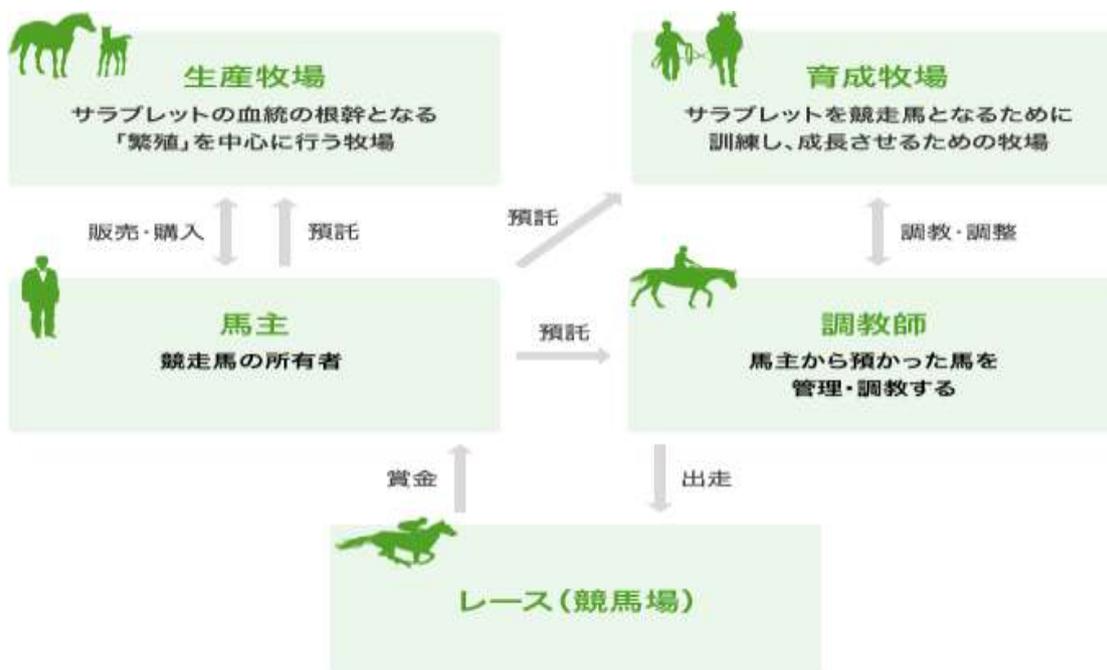


図1：競走馬がデビューするまでの流れ

出典：BOKUJOBU - 競走馬生産・育成牧場就業応援サイト

#### (4) 経済規模と社会的影響

競馬産業の市場規模は極めて大きい。JRAの年間売上は約3兆円に達し（JRA、2023）、配当金や国庫納付金などを通じて多額の財政的貢献を行っている。競馬場や牧場を訪れる観光客の増加は地域経済の活性化にも寄与しており、競馬は社会的にも重要な産業として位置づけられている。

#### (5) 成功の影にある課題と動物福祉への影響

この成功の陰で、課題も存在する。生産頭数と需要のバランスが崩れることで、毎年多くの引退競走馬が行き場を失っている点はその代表である。競走成績に基づいて価値が変動する仕組みの中では、競技から離れた馬の存在が軽視されやすく、動物福祉の理念が十分に反映されているとは言い難い。また、中央と地方の間で経済的格差が大きく、引退後のサポート体制にも差が生じている。中央競馬（JRA）は、日本中央競馬会法に基づいて設立された特殊法人であり、年間約3兆円規模の売上を誇る巨大産業である。そのため、JRAには

高い収益性に裏付けられた安定的な財源が確保されており、引退競走馬を対象とした支援事業を継続的に実施できる体制が整っている。具体的には、2021年に開始された「引退競走馬支援事業」において、再調教の補助や養老牧場への支援、さらにはトレーサビリティ向上を目的としたデータ管理の整備など、多面的な支援策が展開されている。これらの取り組みは、中央集権的な運営構造と潤沢な資金があればこそ可能となるものである。

これに対して地方競馬は、各地方自治体が主催者であり、統括機関である地方競馬全国協会（NAR）は中央競馬のJRAのような一元的な運営権限や財源を持っていない。地方競馬の売上規模は中央競馬に比べて大幅に小さく、過去には赤字や経営危機に直面して廃止された競馬場も存在する。そのため、各主催者が引退競走馬支援に十分な予算を割くことが難しい構造があり、結果として支援が制度として十分に整備されにくい状況にあるといえる（NAR、2022）。

さらに、産業構造の観点からみても、中央競馬と地方競馬の間には大きな違いが存在する。中央競馬の場合、生産牧場から調教師、馬主、競馬場までの流れが比較的安定しており、中央競馬全体で馬の個体情報を管理・共有する体制が構築されている。そのため、引退後の馬の追跡や再就職先への橋渡しなどが制度的にも技術的にも実施しやすい。一方で地方競馬は、地域ごとに厩舎や馬主が独立して活動しているため、馬の流通経路や管理方法が地域によって大きく異なる。こうした分散的な構造は、引退競走馬の追跡管理を困難にし、再調教や余生支援のためのネットワーク整備を阻害する要因となっている。これらの問題は、競馬産業の構造そのものが原因であり、単なる個別の福祉問題ではなく、制度的な課題として捉える必要がある。

以上のように、日本の競馬産業は国の管理のもとに成立する大規模な経済システムであり、多くの関連産業を支える一方で、競走馬という生き物が経済的価値に左右されるという矛盾を抱えている。この構造の理解は、引退競走馬の福祉問題を考察するうえで欠かせない前提であり、次章ではその視点を動物福祉の概念から詳しく検討していく。

## 第2章：「動物福祉」の視点から見た馬の福祉

### （1）動物福祉の定義

動物福祉（Animal Welfare）とは、動物がその生涯を通じて健康で快適に生活し、痛みや恐怖、苦痛から解放される状態を指す概念である。世界動物保健機関（WOAH, 2019）は、動物福祉の基本理念として主に「五つの自由（Five Freedoms）」を提示しており、これは①飢えや渇きからの自由、②恐怖や苦痛からの自由、③痛みや疾病からの自由、④不快からの自由、⑤本来の行動をとる自由、の五項目から成る。競走馬も人間社会の中で利用される動物である以上、これらの自由をいかに保障するかが重要となる。特に、現役を引退した後の

競走馬は経済的価値を失うことでその扱いが不安定になり、福祉の確保が困難になるという構造的な課題を抱えている。

## (2) 引退競走馬と動物福祉との関係

日本では毎年約 6,000 頭前後の競走馬が引退している (JRA、2023)。JRA による登録抹消頭数を見ると、その多くが 3~6 歳と比較的若年であり、寿命が平均 25 歳前後であることを考えると、引退後も長い余生が続くことになる<sup>4</sup>。引退競走馬の行き先は、主に繁殖用、乗馬用、養老牧場、あるいは輸出や食肉転用などに分類される。繁殖馬となるのは主に競走成績が優秀な一部の馬に限られ、多くの引退馬は明確な受け皿を持たないまま競馬界を去るのが実情である。特に牡馬の場合は繁殖用途に限られるため、引退後の行き場が見つからないケースが少なくない。

引退競走馬の福祉上の課題は、動物福祉の五つの自由の観点から整理できる。まず「飢えや渇きからの自由」に関しては、飼養放棄や経済的困難により、十分な飼料や水が与えられない事例が報告されている。引退馬の維持には年間数十万円単位の費用がかかるため、所有者が個人で引退馬を世話し続けることは容易ではない。「痛みや疾病からの自由」についても、競走時の怪我や慢性的な運動器疾患を抱えたまま引退する馬が多く、十分な治療を受けられずに放置されるケースが存在する<sup>5</sup>。医療費の負担が重いことがその一因である。

また、「恐怖や苦痛からの自由」という観点では、競走馬が長期間厩舎内で管理されていた生活から一転し、引退後に新たな環境 (牧場や乗馬クラブなど) へ移行する際に大きなストレスを感じる事が指摘されている。特に社会的動物である馬にとって、群れから切り離されたり、人との接し方が変化したりすることは心理的負担が大きい。「本来の行動をとる自由」に関しても、引退後の飼養環境が必ずしも放牧可能とは限らず、十分な運動や行動ができないケースがある。これらはいずれも、競走馬の福祉が生涯を通して一貫して保障されていない現状を示している。

## (3) 福祉向上のための事例

こうした課題を受け、日本では近年、引退競走馬の支援に向けた取り組みが進みつつある。日本中央競馬会 (JRA) は 2021 年に「引退競走馬支援事業」を開始し、再調教や再就職支援、養老牧場への補助などを行っている (JRA、2021)。また、民間団体では、一般社団法人引退馬協会 (RHA) や TCC Japan (引退競走馬ファンクラブ) などが寄付や里親制度を

---

<sup>4</sup> 一般財団法人ホースコミュニティ『馬の寿命と余生に関する基礎資料』(2020)

<sup>5</sup> 高橋勇記ほか「競走馬にみられる運動器疾患の疫学」(Journal of Equine Science, 2016)

通じて引退馬の飼養支援を行っている<sup>6</sup>。さらに、SNS やクラウドファンディングを活用した「ファンによる支援」も広がっており、社会的関心の高まりが見られる。一方で、これらの活動は主に民間の努力に依存しており、統一された制度や法的枠組みは存在していない。

海外に目を向けると、イギリスの「RoR (Retraining of Racehorses)」やアメリカの「TAA (Thoroughbred Aftercare Alliance)」など、公的・民間が連携して引退競走馬の再調教・追跡管理を行う制度が整備されている。これらの国では、競走馬の生涯を通じた福祉を社会全体で支える仕組みが構築されており、この点が日本との大きな差となっている。

#### (4) 福祉の重要性

日本では、次の行き場がなく現役生活を終えた馬の行方を追うことはタブー視されてきた。引退競走馬の福祉の確立には、経済的支援だけでなく、社会全体の意識改革も必要である。競馬ファンや馬主、関係団体が「引退してからも馬の一生は続く」という認識を共有し、馬を単なる娯楽のための経済動物としてではなく、尊い生命として捉えることが重要である。動物福祉の理念に基づき、競走馬の生涯に渡る福祉を実現することが、持続可能な競馬文化の確立につながるといえるだろう。

### 第3章 セカンドキャリアの多様性とその可能性

#### (1) セカンドキャリアにおける再調教・再教育の重要性

引退競走馬が社会の中で新たな役割を得るためには、競走馬時代とは異なる環境や仕事に適応するための「再調教 (リトレーニング)」が不可欠である。競走馬として育成される過程では、速く走ることを目的とした調教が中心であり、走行フォームも短距離のスピードを重視した特殊化が進んでいる。しかし、乗用馬として必要とされる能力は、スピードよりも人とのコミュニケーション能力や落ち着き、基本的な騎乗の受容性などである。このため、競走馬のセカンドキャリア実現には、精神面の安定化・基本的な馬術トレーニングの習得・環境への再適応など多角的な再教育が求められる。

再調教には一定の時間とコストがかかるが、これを適切に行うことで、競走馬の潜在能力を社会に還元できるとともに、競馬産業に対する社会的信頼性の向上にも寄与する。特に、競走馬は運動能力が高く、学習能力も優れているため、適切な指導を受ければ様々な仕事に

---

<sup>6</sup> 『引退馬協会 年次報告書 2023』

転換可能な高いポテンシャルを備えている。



## (2) 競走馬から乗用馬へのトレーニング転換

競走馬の調教では、速度競争に特化した運動が繰り返されるため、身体的・精神的特徴が一般的な乗用馬と異なる場合が多い。たとえば、競走馬は以下のような傾向をもつことが指摘されている。

- 前進気勢が強く、指示に対して敏感
- 群れと人の動きに対して反応しやすい
- 常歩・速歩よりも駈歩を好むケースが多い

そのため、乗用馬へ転換する際には、

- 1.基本姿勢の安定化
- 2.人の扶助（脚・手綱・体重）に対する理解の再構築
- 3.新しい環境に慣れるための段階的な馴致（訓練）

が必要とされる。特に、競走馬はレース中の興奮状態が習慣化していることもあり、落ち着いた環境での再学習が極めて重要である。

この「転換トレーニング」は高度な専門性を要するため、再調教を担うトレーナーや施設の拡充は、日本の引退競走馬支援における大きな課題の一つとなっている。



## (3) 具体的なセカンドキャリアの事例

### 【1】乗馬クラブでの乗用馬

乗馬クラブは、引退競走馬にとって最も一般的な受け皿のひとつである。乗用馬のうち7割が引退競走馬とされている。（日本馬事協会、2021）特に、初心者向けレッスンや軽乗用の活動に適した個体は、乗馬クラブで安定した仕事を得ることが多い。

また、公益財団法人全国乗馬倶楽部振興協会では乗馬・馬術ファンの拡大を図ることを目的として、引退競走馬杯という意味の、RRC：Retired Racehorse Cupを2018年度より開催している。これは、競走馬登録されていたサラブレッドが引退し、リトレーニング後に乗用場として用途変更した際、特定の条件を満たしている場合に出場できる障害馬術・馬場馬術・総合馬術・TREC（野外騎乗における人馬の適性を広範囲にわたってテストする競技）競技である。出場馬の中には、競馬の一大レースである天皇賞を勝った馬が第二のキャリア

として再び活躍している事例もある。

ただし、競走馬は繊細で敏感な性質のため、すべての馬が乗用馬に適応できるわけではない。適性判断と再調教が適切に行われれば、長期間にわたりレッスンホースとして活躍する例も少なくない。

## 【2】セラピーホース

近年、馬を用いた教育的・心理的支援（ホースセラピー）が注目されている。ホースセラピーとは、馬とのふれあいや乗馬活動を通じて、心身の健康や社会的な能力の向上を目指す療法の総称である。アニマルセラピーの一種だが、馬特有の動きや感覚刺激が人の身体的・精神的なリハビリテーションや社会性の改善に大きな効果をもたらすことが分かっている。（GOCOO HORSE VILLEAGE 2015）競走馬は人に慣れている個体が多く、また、乗馬の程よい揺れに効果が期待されるため、適性が合えば、

- 自閉症児支援
- 高齢者の認知症予防
- 心理的ストレスの緩和

といったプログラムで活躍できる（読売新聞オンライン、2024）。ヨーロッパやアメリカをはじめとした海外では標準化が進んでおり、医療・福祉分野に導入され、高い評価を受けている。日本でも日本ホースセラピー協会などの専門団体の普及活動により年間利用者数が着実に増加しており、今後においてもその重要性和必要性がさらに高まることが期待されている分野である。（GOCOO HORSE VILLEAGE 2025）

## 【3】教育・観光分野での活用

大学や専門学校の馬術科では、教材として引退競走馬を受け入れる例が増えている。また、観光牧場や乗馬体験施設では、来場者と触れ合う“アンバサダー”としての役割を果たすケースもある。こうした活動は馬の社会的認知を高め、競馬産業のイメージ向上にも寄与する。

帯広畜産大学では、古くから馬の獣医学や畜産領域の教育や研究活動を行っている。国内唯一の国立農学系単科大学として共同獣医学過程および畜産科学過程があり、大学の新入生全員が、乗馬や馬の管理を実際に体験することで、馬と人との関係について理解する機会が設けられている。（帯広畜産大学「人と動物が共存する社会を目指して」p24）

帯広畜産大学では、人間と動物との関係を学ぶ教育機能を強化して、人間と動物が共存する豊かで潤いのある社会づくりに貢献すると共に、学生などと馬が触れ合う機会を拡大させるため、「人と馬の絆による社会貢献事業」を推進している。その一つとして、「ちくだい馬フォーラム」を開催している。ちくだい馬フォーラムは、子供から大人まで幅広い市民に馬とのふれあいを提供し、帯広十勝の風土や歴史と馬との関わり、馬と人間との関係について理解を促進することを目的としたイベントである。馬に関する学術講演や、一般市民の体

験乗馬、馬車運行、馬術部やサークルによる馬術ショーや流鏑馬の披露など馬を用いた様々な企画が実施され、教育・観光分野で馬を活かした良い事例と言える。(同 p26)

#### 【4】映画・CM・イベントの出演馬

外見が美しく、表現力のある競走馬は、映像メディアやイベントで活躍することもある。特に、引退後も良い体格や落ち着きを保っている馬は、企業広告や映画撮影に採用されることがあり、競走能力以外の魅力を活かした活躍の場の一つとなっている。

昨今では、競馬会を舞台にした人間ドラマを描いた TBS テレビの日曜劇場『ザ・ロイヤルファミリー』で、数多くの引退競走馬が出演した。



出典：Yogibo



## (4) 海外の成功事例との比較分析

### 【1】イギリス：RoR (Retraining of Racehorses)

イギリスでは、引退競走馬の再調教と競技参加を支援する RoR が制度的に確立している。RoR (Retraining of Racehorses) は、イギリスにおける引退競走馬支援の中心的組織であり、「競走馬の再調教・再就労を促進するための全国的プログラム」である。2000年に British Horseracing Authority (BHA：英国競馬統轄機構) によって創設され、現在ではイギリス国内で最も大規模で制度化された引退馬支援モデルとして知られている<sup>7</sup>。ROR は、慈善団体

---

<sup>7</sup> RoR. Education & Outreach Programs. <https://ror.org.uk/educatio>

として設立・運営されており、国(政府省庁)が ROR を運営している訳では無い。行政は、賭事課金を管理する公的機関を通じて間接的に関与しており、この公的機関が、競馬から得られる資金を競馬の健全運営、馬の福祉、産業基盤維持といった面に配分することにより、これが ROR の主要な資金源の一つとなっている。これは、競馬で生まれた利益を、引退後の馬の福祉に還元する制度として国が制度設計している部分である。

RoR の目的は、「競走能力を失ったサラブレッドが、新たな分野で活躍できるよう支援し、馬の生涯福祉を保証すること」であり、その活動は再調教から競技会の開催、普及活動、追跡管理まで多岐にわたる。RoR 登録馬は、ショージャンピング、馬場馬術、ホースショーなど多様な競技会に参加でき、「第2の競技キャリア」を築く馬も多い。セカンドキャリアの幅広さに加え、国レベルで馬を追跡管理する仕組みが整備されている点は、日本の参考になる。<sup>8</sup>

## 【2】フランス：AFCE（引退馬連盟）

AFCE（Association Française pour la Reconversion des Chevaux de Course）は、フランス競馬界における引退競走馬の再調教・再就労を目的として設立された団体であり、フランス競馬の統轄機関である France Galop および LeTrot と連携して引退馬のセカンドキャリア支援を行う組織である<sup>9</sup>。

AFCE は 2010 年代に広く活動が認知され始め、後に France Galop の公式パートナー団体である Au-Delà des Pistes（ADP）の設立へとつながり、フランス全体の引退馬支援の制度化に大きく貢献した。したがって、AFCE は「フランスにおける引退競走馬再調教プログラムの草分け的存在」として位置づけられる。

フランスの競馬産業は、国家主導の公営体制を特徴としており、フランスは「馬の文化」を国民教育に位置付けており、AFCE/ADP もこの文化政策を背景に小中学校への教育プロジェクト、動物福祉授業への教材提供、競馬産業への教材提供、競馬産業と馬文化の博物館展示、SNS での情報発信等の教育活動を行う。

このように、市民全体が「引退馬の保護＝文化を守る行為」と認識する環境が形成されており、政府と競馬団体が協力し、引退馬の受け皿を整備している。特に、公共牧場やリトレーニングセンターを通じて乗馬教育との接続が重視されている。乗馬クラブの利用率が高い文化的背景もあり、競走馬が乗馬市場にスムーズに移行できる仕組みが形成されている<sup>10</sup>。

## 【3】アメリカ：TAA（Thoroughbred Aftercare Alliance）

広大な国土と多様な競技文化を持つアメリカでは、TAA が引退馬支援団体を認証し、質

---

<sup>8</sup> RoR. Competition opportunities for retrained racehorses. <https://ror.org.uk/competitions>

<sup>9</sup> Au-Delà des Pistes の公式サイト「Home」ページ

<sup>10</sup> The Arabian Magazine（2019年5月3日）

の高い再調教を保証している。TAA (Thoroughbred Aftercare Alliance) は、アメリカにおける引退競走馬の再調教・保護・譲渡を行う施設を認定し、資金支援を行うための全国的非営利組織である<sup>11</sup>。

2012年に設立され、アメリカ競馬の主要団体(The Jockey Club、Keeneland Association、Breeders' Cup など)の主導で発足した。TAAの使命は、「アメリカにおける引退サラブレッドの生涯福祉を保証するため、各地のアフターケア団体を審査・認証し、資金援助を行うこと」である<sup>12</sup>。TAAは民間主導の非営利組織であり、行政機関は直接的に運営や統括を行っていない。州政府は賭事収益の使用や動物福祉に関する最低限の法的枠組みを提供するにとどまり、引退競走馬のアフターケアは主に民間の責任として位置づけられている。

TAAは、アメリカ国内で最も権威のある引退競走馬支援組織とされ、競馬産業全体から「公式認定機関」として位置づけられている。TAAの中心となる活動が「認証制度」である。認証を受けるためには厳しい審査が課せられ、基準には厩舎・放牧地・医療設備・飼養環境の質、馬の福祉に関する専門知識、財務状況の透明性など、多くの条件が含まれる。認証を受けた団体はTAAから助成金を受けることができる。乗馬スポーツの裾野が広く、イベント、レクリエーション、トレイルライディングなど、非常に多彩なセカンドキャリアが存在する<sup>13</sup>。



## (5) セカンドキャリアの可能性のまとめ

海外の事例と日本の現状を比較すると、引退競走馬が多様な場面で活躍できる可能性は十分に存在していることが分かる。特に以下の点が将来的な発展の鍵となる。

- 1.再調教の標準化と専門人材の育成
- 2.乗馬・教育・福祉分野との産業連携強化
- 3.競走馬の魅力を社会に伝える広報活動の拡大
- 4.公的制度としてのセカンドキャリア支援の整備

こうした取り組みが進むことで、競走馬は「使い捨てられる資源」ではなく、「社会に貢献し続けるパートナー」としての地位を確立していくことが期待される。

---

<sup>11</sup> TAA 公式ウェブサイト “What Is Aftercare?”

<sup>12</sup> 同上

<sup>13</sup> 同上

## 4章 動物福祉の観点から見た今後の課題

### (1) 制度的課題—「仕組みとしての福祉」がまだ整っていない

これまで見てきたように、日本では引退競走馬に関する支援や受け皿は少しずつ広がりつつあるものの、制度として十分に整っているとは言い難い。特に問題なのは、引退馬の福祉を一貫して保障する全国的な仕組みがまだ存在していないという点である。

中央競馬（JRA）と地方競馬（NAR）の間で支援の量や質に差があることは前章で述べた通りで、この構造的な格差を埋める取り組みが必要となる。また、引退競走馬の再調教や養老牧場の運営には費用がかかるため、現状では民間団体や個人寄付に依存する部分が多い。海外の TAA（アメリカ）のような、業界全体からの拠出金を活用する仕組みが日本でも必要だと考える。

さらに、譲渡後の馬のトレーサビリティや適切な飼養環境の基準を保証するための認証制度を導入することで、一定水準以上の福祉を担保することができる。現在の日本では、団体ごとに基準がバラバラなため、全国的な統一基準の整備が課題として残っている。

### (2) 競馬産業の責任—「どこまで面倒を見るのか」という問題

次に、競馬産業としてどこまで責任を担うべきかという点である。

競走馬は産業によって生産され、調教され、競走し、そして利益を生む存在である。したがって、馬主や調教師だけではなく、競馬産業全体が引退後のケアにも一定の責任を分担すべきだと考えられる。

たとえば、出走 1 回ごとに引退馬基金への積立を行う、セリ市場や馬主登録の際に寄付を義務化する、競馬場や地方自治体が補助金を設けるなどの方法が考えられる<sup>14</sup>。

現状、中央競馬は比較的財源が豊富であるため、引退馬支援事業が進んでいるが、地方競馬では主催者の収益金は、その地域の教育・文化の発展や社会福祉の増進、医療の普及やスポーツの振興、都市計画その他公共施設の整備などに使われるため、そこまで手が回らないのが実態である。制度的・財政的な格差を埋めつつ、競馬産業全体としての「福祉責任の分担」を明確にしていく必要がある<sup>15</sup>。

---

<sup>14</sup> Thoroughbred Aftercare and Welfare (TAW) ホームページ

<sup>15</sup> JRA の公式「引退競走馬への取組み」ページ

### (3) 社会的認識・教育的課題—「命の尊さ」を社会にどう伝える

か

引退競走馬をめぐる問題は、制度やお金だけで解決するものではない。もっと根本には、「命をどう考えるか」という社会全体の意識の問題がある。日本では、競走馬が表舞台で輝く姿を知っている人は多いものの、その裏で引退後の受け皿が不足していることや、一部の馬が十分なケアを受けられずに行方不明になっている現状は、意外と知られていない。このような状況を変えるには、競馬場での啓発イベント（馬の余生・福祉に関する展示）、学校教育での動物福祉学習、SNS やメディアでの引退馬の情報発信などの教育活動が重要になると考える。特に若い世代に対して、「命の大切さ」「動物を社会の一部として扱う姿勢」を伝えることが、将来的な社会変革につながると考えられる。

### (4) 動物福祉の実現に向けた方向性—「馬にとっての幸せ」と「人

との共生」をどう両立するか

動物福祉の最終的な目標は、馬がその生涯を通じて健康で、安心でき、尊厳を持って生きられる環境を整えることである。しかし同時に、人間社会が馬と関わり続ける以上、「馬の幸せ」と「人間との共生」を両立させることが求められる。

たとえば、乗馬やセラピーなどの活動は、馬にとって精神的・身体的に良い刺激となることもあれば、適切に管理されなければ逆に負担となるリスクもある。重要なのは、馬に合った仕事の見極めや、休息・医療・環境の整備が適切に行われることである。

また、牧場や乗馬クラブの経営者だけでなく、馬主、ファン、競馬関係者など、馬に関わるすべての人々が「馬の視点に立つ」ことが求められる。

### (5) まとめ：制度・産業・社会が一体となった福祉の実現へ

以上の点から、今後の日本における引退競走馬の福祉向上には、

- 1.制度的基盤の整備（認証制度・財源確保）
- 2.競馬産業全体による責任の共有

### 3.社会的認識の変化と教育の推進

#### 4.馬の幸せと共生の両立を目指した実践

の4つが不可欠だと考えられる。

引退競走馬の問題は、単なる「動物保護」ではなく、産業の持続可能性にも直結する重要なテーマである。

競馬が今後も社会に支持され続けるためには、「走れなくなった後の馬の扱い」こそが最も注目されるべきである。

動物福祉の理念を社会全体で共有し、制度・産業・教育を通して「馬に優しい社会」をつくっていくことが、今後の大きな課題であり、同時に実現可能な未来である。

## 【おわりに】

本稿では、日本における競馬産業の成り立ちや規模を整理した上で、競走馬のライフサイクルに着目し、引退後の競走馬が直面する課題を動物福祉の視点から考察してきた。競馬産業は大きな経済的・社会的影響力を持つ一方で、その成功の裏側には、引退競走馬の扱いという見過ごされがちな問題が存在していることが明らかになった。

動物福祉の観点から見ると、引退競走馬は単に「役目を終えた存在」ではなく、生涯にわたって配慮されるべき存在である。再調教や再教育を通じて、乗用馬やセラピーホースなど多様なセカンドキャリアを歩む可能性があることは、本研究で取り上げた事例や海外の成功例からも確認できた。しかし、その実現は個々の関係者の努力や善意に大きく依存しており、日本では「仕組みとしての福祉」が十分に整っているとは言い難い。

第4章で述べたように、今後の大きな課題は、競馬産業が引退後の競走馬に対してどこまで責任を負うのかを明確にし、制度・産業・社会が一体となって動物福祉を支える体制を構築することである。また、引退競走馬の問題を専門家や関係者だけのものとせず、社会全体で「命の尊さ」や「人と動物の共生」について考えるための教育や情報発信も重要であると考えられる。

## 【参考文献一覧】

・JRA「競馬法」ページ

<https://www.jra.go.jp/kouza/yougo/w173.html> ☒

・早稲田大学リポジトリ「第五章 競馬法の制定」

[https://waseda.repo.nii.ac.jp/record/6707/files/Honbun-3864\\_07.pdf](https://waseda.repo.nii.ac.jp/record/6707/files/Honbun-3864_07.pdf) ☒

- ・ 地方競馬全国協会(NAR)

URL: <https://nar.netkeiba.com/about/> (nar.netkeiba.com)

- ・ Netkeiba

[https://news.netkeiba.com/?pid=column\\_view&cid=47692](https://news.netkeiba.com/?pid=column_view&cid=47692) (netkeiba.com)

- ・ 北海道競馬振興公社

<https://www.hfhrc.or.jp/> (hfhrc.or.jp)

- ・ 日本中央競馬会『事業成績・財務情報』<https://www.jra.go.jp/company/outline/finance/>
- ・ 農林水産省『競馬制度の概要』

<https://www.maff.go.jp/j/chikusan/kikaku/keiba.h>

- ・ 日本中央競馬会 (JRA) (2021)
- 『引退競走馬支援事業について』

<https://www.jra.go.jp/company/social/aftercare/>

- ・ 地方競馬全国協会 (NAR) (2022)
- 『地方競馬の現状と課題』

<https://www.keiba.go.jp/about/>

- ・ 地方競馬全国協会 (NAR) (2022)
- 『地方競馬年次報告書』

<https://www.keiba.go.jp/about/annual/>

- ・ World Organisation for Animal Health (WOAH) (2019)

Terrestrial Animal Health Code – Animal Welfare

<https://www.woah.org/en/what-we-do/animal-health-and-welfare/animal-welfare/>

- ・ Farm Animal Welfare Council (FAWC)

Five Freedoms

<https://www.gov.uk/government/publications/fawc-updates/five-freedom>

- ・ 日本中央競馬会 (JRA) (2023)
- 『競走馬登録・抹消頭数データ』

<https://www.jra.go.jp/datafile/seiseki/>

- ・ 日本中央競馬会 (JRA)
- 『競走馬の一生』

<https://www.jra.go.jp/fun/life/>

- ・ 農林水産省
- 『馬をめぐる情勢』

<https://www.maff.go.jp/j/chikusan/kikaku/uma.html>

- ・ 公益社団法人 日本馬事協会

『引退競走馬の現状』

<https://www.bajikyo.or.jp/>

- ・ 一般社団法人 引退馬協会 (RHA)

<https://rha.or.jp/>

- ・ TCC Japan (引退競走馬ファンクラブ)

<https://tcc-japan.com/>

- ・ Retraining of Racehorses (RoR)

<https://www.ror.org.uk/>

- ・ Thoroughbred Aftercare Alliance (TAA)

<https://www.thoroughbredaftercare.org/>